

(3) 両県及び北東アジアの子ども達の交流

- 宍道湖KODOMOラムサール探偵団と米子水鳥公園子どもラムサールクラブ、そして北東アジア(韓国)のラムサール条約湿地で活動している子ども達を中心とした交流会を開催する。
- 中海での夏のヨット操縦や宍道湖でのゴズ釣りを一緒に行うなど、相互に行き来し、両湖に親しみ賢明な利用についてアイデアを話し合い、大人へ提案する。

3 予算額(両県で均等割負担)

(単位:千円)

項目	全体事業費	備考
ラムサール条約登録5周年記念展示	21,900	
ラムサール条約登録5周年記念シンポジウム	3,000	
両県及び北東アジアの子ども達の交流	1,000	
計	25,900	

4 関連事業(島根県・鳥取県の独自事業)

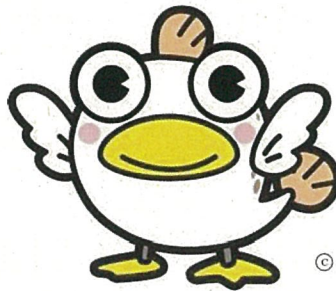
区分	項目	内容
島根県	拠点施設のラムサール月間(ゴビウス)	登録日から1ヵ月前を5周年月間として位置付け、宍道湖自然館「ゴビウス」で特別企画展を開催
	しんじ湖ラムサール号でのエコツアー	一畑電鉄とゴビウスの協力を得て、ラムサール電車を活用したエコツアーを実施
	宍道湖・中海 鳥と魚にふれるバスツアー	野鳥観察、風土スポット巡りをはじめ、魚類や宍道湖について直接漁師の話を聞ける体験型バスツアーを開催
	年間行事としての環境学習会	地元での学習会を10回程度開催
鳥取県	みんなで守る中海の自然環境保全推進事業補助金	中海及び上流地域において、自治会や団体等が行う環境保全や賢明利用につながる活動の経費を助成 〔①中海体験クルージング、②中海ポスターコンクール、③中海夕暮れコンクール、④環境新聞「中海」発行及び標語等の募集、⑤中海アダプトプログラム、⑥加茂川のキャンドル設置等〕
	中海自然浄化機能回復事業	自然の浄化機能による持続的な水質浄化が可能な環境の再生を図る事業の実施
	拠点施設のラムサール月間(米子水鳥公園)	ゴズ釣り大会、ウォーキング、写真展



中海圏域振興ビジョン

～出会いは なかうみ 動きだす 未来～

ダイジェスト版



中海圏域のイメージキャラクター「ウンパくん」

平成22年3月

中海市長会

中海圏域振興ビジョン（ダイジェスト版）

1. はじめに

中海圏域には、ラムサール条約登録湿地である「中海・宍道湖」をはじめとする豊かな自然があり、日本神話の時代から連綿と続く歴史・文化も数多く残っています。また、米子空港-ソウル仁川空港間の国際定期便などに加え、境港市と韓国東海市、ロシアウラジオストク市を結ぶ国際定期貨客船が就航したことにより、今後は韓国、ロシア、さらにはシベリア鉄道を介して欧州を視野に入れた国際物流の拠点として、西日本のゲートウェイ（玄関口）となりうる高いポテンシャル（潜在力）を有しています。

中海市長会では、この中海圏域が総合的・一体的に発展していく上で指針となる圏域の“将来像”を提案するため中海圏域の振興ビジョンを策定しました。

2. 中海圏域の構成

本ビジョンでの中海圏域は、中海沿岸の米子市、境港市、松江市、安来市、東出雲町の4市1町で構成されるエリアです。

中海圏域の構成市町



3. 圏域発展を牽引する三つの方向性

○ 北東アジアから世界へつながる西日本のゲートウェイの構築 ～なかうみで出会う～

中海圏域は、高速道路（山陰道、米子自動車道）や鉄道（JR 山陰線、伯備線）、飛行機（米子空港発着の東京便、名古屋便）などにより、国内の他地域と山陰を結ぶ交通の結節点となっています。

また、中海圏域は、北東アジアに近接しており、境港とロシアのウラジオストク・韓国の東海や釜山・中国の上海や青島、大連を結ぶ国際航路、米子空港と韓国仁川空港を結ぶ国際航空路線によって北東アジアとつながっているという強みがあります。さらには、北東アジアにあるハブ港、ハブ空港あるいはシベリア鉄道を介して、広く世界とつながっています。

近年、中国をはじめとする北東アジア諸国は著しい経済成長を遂げており、日本とのヒト・モノ・カネの流動は拡大していることから、国内・海外へのネットワークがあるという圏域の強み（優位性）を活かし、国内他地域および北東アジアとの交流・連携を促進することが、中海圏域の発展につながります。

- | | |
|-------|----------------|
| 課題・事業 | ◇ 国際交流の促進 |
| | ◇ 境港・米子空港の機能強化 |
| | ◇ 境港・米子空港の利用促進 |

○ 中海をはじめとする豊かな自然と人が織りなす調和の実現 ～なかうみを守る～

中海圏域には、斐伊川流域の汽水域である中・宍道湖をはじめ、日本海や河川、森林など豊かな自然があります。特に中海は、平成17年にラムサール条約に登録され、「国際的な資源」として位置づけられており、沿岸の4市1町や鳥取・島根両県、国をはじめとする関係機関、NPO、住民団体などが連携し、自然環境を保全しつつ、中海から得られる恵みを賢く利用（ワイズユース）する継続的な取り組みが展開されています。

中海圏域の生活環境を一層改善し、同時に圏域の持つ魅力を高め、国内外に強くアピールしていくためには、こうした取り組みを拡充させ、圏域の強みである豊かな自然を守り、後世に残していくことが必要です。

- 課題・事業 ◇ 豊かな自然の保全・活用
◇ 自然と調和した社会の構築

○ 自然・人材・技術の連携による世界に誇る中海ブランドの創出

～なかうみで創る～

中海圏域の4市1町には、特色ある産業集積や技術（米子の氷温技術※、境港の水産業、松江市のボタン・Ruby、安来市のヤスキハガネ、東出雲町の農機具製造など）、豊富な地域資源（中海をはじめとする豊かな自然や景観、温泉などの観光資源、圏域に残る歴史や文化など）、人材（圏域内の大学・研究施設など）など、圏域固有の強みがあります。

こうした強みを活かし、圏域を一体と捉えた産業振興を図ることで、停滞している地域経済を活発にする必要があります。

- 課題・事業 ◇ 圏域内の技術、ノウハウ、製品等の連携による新産業の創出
◇ 人材の誘致・育成・確保 ◇ 個性を活かした観光振興
◇ 水質浄化技術など環境技術の開発と活用

4. 圏域発展を支えるひとつの基盤

○ 4市1町がつながり、あたかもひとつのように機能するまち

～なかうみをつなげる～

中海圏域は県境があり、交通が不便である、情報交流が不十分であるなどが課題であると指摘されています。こうした圏域の弱みは、連携を促進する上で、大きな支障となっています。したがって、三つの方向性を実現するには、連携の基盤となる圏域内のネットワークを、ハード・ソフトの両面から強固にする必要があります。

ハード面では、江島大橋や山陰道などの社会基盤の整備がこれまでも行われてきましたが、圏域と他都市とを結ぶ高速道路や圏域内の道路網など、他地域よりも遅れているものもあります。そこで、中海圏域の将来に必要な社会基盤の充実が必要です。

また、中海圏域に住む人々の生活や経済活動は、市町の枠を越えて行われていますが、圏域には、まだまだ目に見えない「壁」のようなものも感じられるとの意見も多いため、圏域内の人々の交流や情報交換・一体となって取り組めるイベントや行事などを通じて、ソフト面での連携の強化と相互補完に取り組み、圏域の一体感の醸成を図ることが必要です。

- 課題・事業 ◇ 圏域を支える基盤の充実 ◇ 一体的な都市圏としての気運醸成
◇ 情報基盤の整備 ◇ 圏域内都市間の機能分担、連携・補完の推進

5. 中海圏域の将来像

出会は なかうみ 動きだす 未来

中海圏域は、日本神話の時代より、圏域の豊かな自然を享受するとともに、圏域内だけでなく国内・対岸諸国との交流を通して新しい文化と技術を創造し、発展してきました。「出会は なかうみ 動きだす 未来」という言葉には、これまで様々な「出会い」によって夢が実現してきたように、圏域が一体となって実現する新たな中海圏域の夢も、新しい「出会い」を通じて実現させたい、という思いをこめました。現在の出会いもこれからの出会いも、全ては新しい未来へとつながっていきます。中海圏域に集う全ての人々の「出会い」が、新しい交流の促進、新しい産業の育成という未来を動かすステージを次々に生みだしていきます。

中海圏域がめざすべき進路（将来像にかえて）

「西日本のゲートウェイの構築」を通じて中海圏域が発展著しい北東アジアをはじめ世界とつながることで、「中海ブランドの創出」も世界的な広がりの中で開発・技術革新や新産業の創出、流通、販売に結びつけていくことが可能となります。

また、その結果としてもたらされる競争力、知名度などブランド力のグレードアップがゲートウェイを一層魅力あるものとし、それを流れる人、物、情報の量と速度、質を増大、加速、向上させていきます。

一方、「豊かな自然と人が織りなす調和の実現」を図り、中海をはじめ貴重で魅力に富んだ自然環境を維持保全していくことが、国内はもとより世界的なこの圏域に対する認知度、イメージアップに結びつきます。

同時に、未来への遺産として、私たちの次の世代へと引き継いでいくことにより、この圏域が有するゲートウェイやブランドの将来に渡る存在価値を高めていくことにつながります。

そして、三つの方向性が相互に関連し、それぞれの機能や役割を補完し、増幅しあうことで、中海圏域発展のスパイラル（好循環）を生み出していく基盤として、道路・交通・情報網等のハード整備、自然環境保全の活動等に代表されるソフト面での取り組みによる「あたかもひとつのまちのように機能するまち」を創りあげていくことが求められています。

上述の一連の取り組みにより示される中海圏域がめざすべき進路を「人、物、情報が世界に向けて行きかい、産業や暮らしに活気がみなぎり、かけがえのない自然を未来へ継承する中海圏域」としてまとめることができます。

さらに、本ビジョンでは、圏域振興・発展にむけた様々な取り組みを進めていくうえで、この圏域の将来像を「出会いは なかうみ 動きだす 未来」と表現することとしました。

6. 中海市長会が担うべき役割

中海市長会は、その前身であった「中海圏域4市連絡協議会」の連絡調整機関としての時代を経て、平成19年に、従来の連絡調整に「圏域の総合的・一体的な発展の推進を図る」ことをその目的に加え、発展的な改組により設立し今日に至っています。

新たな段階を迎える中海市長会の担うべき役割として、次の3つの役割を掲げることとします。

(1) 圏域発展を支える「ひとつの基盤」づくり

中海市長会は、圏域を構成する住民・団体・事業者が主体的に展開する圏域発展に向けた様々な取組みを積極的に支援することで、「ひとつの圏域」としての一体性を維持、強化していきます。

(2) 「三つの方向性」構築に向けたコーディネート

中海市長会は、住民やNPO、民間企業、連携組織・団体等に国、県も含めた行政などの各主体が協同・連携して取り組む事業の展開や、課題の解決にあたり、各主体に最も身近な存在としての機能を発揮することで「ひとつの圏域」におけるコーディネートを行ないます。

(3) 圏域の将来像実現に向けた進行管理

中海市長会は、圏域発展に向けあらゆる分野に関わる存在として、本ビジョンの着実な推進、圏域を取り巻く環境変化等を踏まえた進行管理の役割を担います。